



## 第123回

### プロ野球日本シリーズ第5戦

※2025年10月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 3

プロ野球の「SMB C日本シリーズ2025」は10月30日、阪神甲子園球場で第5戦があり、パ・リーグ連覇の福岡ソフトバンクホークスが、セ・リーグ優勝の阪神タイガースを3―2で破り、4連勝で対戦成績を4勝1敗として、2020年以来5年ぶり12回目（前進の南海、ダイエー時代を含む）の日本一に輝いた。

就任2年目の小久保裕紀監督は初の日本シリーズ制覇。阪神との日本シリーズは3回目で、全てソフトバンクが制した。チームはシーズン序盤に故障者が続出して一時単独最下位に沈んだが、生え抜きの中堅選手が台頭してリーグ連覇を達成。層の厚さを見せつけて頂点に立った。

◇野村 延長勝ち越し弾

生え抜きの中堅、ベテラン、移籍組の全てが融合したソフトバンクが日本一をつかみとった。小久保裕紀監督は優勝監督インタビューで「全ての選手、スタッフ、首脳陣の力がなければ日本一を達成できなかった。たくましい選手に恵まれて幸せです」と喜んだ。

2―2の延長十一回。先頭の野村勇が大仕事をやってのけた。5球目の外角に來た直球を振り抜き、左翼席へ放り込んだ。強化してきた逆方向への打撃が大事な場面で生きた。

チームはリーグ連覇を達成したが、実に苦しいシーズンだった。開幕スタメンに名を連ねていた、周東佑京や栗原稜矢といった主力

選手の多くがけがなどで一時離脱。小久保監督も想定外の事態に「こんなにもうまくいかないものか」と頭を抱える日々だった。

そんな中で急成長したのが4年目の野村と6年目の柳町達。投手では、日本シリーズでもブルペンを支えた松本裕樹や杉山一樹といった救援陣だ。

ベテランでは柳田悠岐がこのシリーズ全試合安打で貢献。移籍組では3試合連続本塁打で最高殊勲選手に輝いた山川穂高や、負傷を抱えながらも第4戦で3点目の適時打を放った近藤健介が存在感を示した。2024年の日本シリーズでは2連勝しながらDeNAに4連敗して下克上を許す屈辱を味あわされた。「あの負けた時の景色や思いを忘れない」と話していた小久保監督が9回胴上げされ、宙を舞った。

◇執念の登板 トラ力尽きる

ボールを投じた腕を下ろしたまま、ぼうぜんとした。後がない阪神の切り札、エース・村上頌樹が

中継ぎとして登板したが、延長十回到に力尽きた。

十回到に村上の名前がアナウンスされると甲子園がどめよいした。シリーズ第1戦で先発し、7回1失点で115球を投げて勝ち投手になってから中4日でベンチ入りしていた。最多勝など投手3冠の村上は、藤川球児監督からの信頼が厚く、窮地に追い込まれたチームのためブルペンで待機していた。

十回を無失点に押さえると、十回もマウンドへ。先頭の右打者・野村勇への5球目だった。やや外寄りの直球を投じたが、野村の強いスイングに、打球は浜風とは逆の右翼方向へ吹く秋風に乗り、右翼席の前列に落ちた。

この試合、2点をリードした阪神は八回到に石井大智を投入。レギュラーシーズンで50試合連続無失点の日本記録を作った右腕に託したが、柳田悠岐に痛恨の同点2ランを浴びた。石井は2024年と25年は本塁打を一本も打たれておらず、25年の失点は4月4月の巨

人戦以来だった。石井で逃げ切れず、村上は決勝点を許し、藤川監督の執念の采配は実らなかった。

阪神は史上最も早くリーグ優勝を決めたが、日本シリーズでは下位打線を中心に元気がなかった。4番の佐藤輝明が5試合連続打点をマークするなど奮闘したものの、全試合2得点以下だった。結局、猛虎打線が目覚めることはなく、2年ぶりの日本一をつかむことはできなかった。